



げしゅ 「下種の期間」～土壁に咲く花を夢見て～



第4回 饅化した親指に見る無我の境地

所属 国土技術政策総合研究所
主任研究官 水上 点晴

「三上（さんじょう）」という言葉をご存じだろうか？11世紀の中国の偉人、歐陽修の言葉で、人が素晴らしいひらめきを得ることができる場所を指すとされている。文字通り、何か3つの物の上にいる時を指しているのであるが、そう言われて思いつく場所がないか想像してみてほしい……。まず1つ目は、枕の上である。皆さん納得であろう。1日の終わりに暖かい布団に包まれて、ホッと一息して眠りにつくことができたときはもちろんのこと、締め切りに追われて（今の私がそうであるが）、様々な想いが渦を巻くような混乱状態で布団に入った時でさえ、否、そういう時にこそ、妙案を携えて目を覚ますという経験を、皆様もお持ちであろう。それは寝ている間に思考が旅をしているからである。第1回でも述べたが、私は家を風雨や外敵から身を守るためのシェルターではなく、未知なる世界へ漕ぎ出すための舟だと捉えている。それが私個人の妄想でないと思われるのには、古代の茅葺であれ異国の金属葺であれ、就寝時に見上げる屋根裏は、たいいどれも船底の形をしている。天井で覆ってしまったり、日中、起きているときには、そのことに気

がつかないのであるが、ひとたび身体を横たえた途端、その船は目前に用意されるのである。「家」という装置を作り出した人類は、「夢」が作り出す幻想や飛躍の効果を、最大限に高めようとして、船を模した屋根を大地に逆さまにかぶせるという妙案を編み出したのではないだろうか。

2つ目は、厠の上である。こんなことを言うと笑われるかもしれないが、私は自宅のトイレに籠るのが好きである。駅など次の客が控えているトイレでは、気ばかりが急いで、早く出そうと意識すればするほど引っ込んでしまう。生きている限り、排泄をすることは摂取することと同じく、大切なことである。食事は家族の団らんのある場であるように、分かち合うことを良しとするが、排泄行為は他人からは秘された場所で、ひっそりと行われるのが常である。その誰にも邪魔されない空間で、一人どうしてもよい思索にふけることで、反対に意識を休ませた方が出やすいというものである。驚くべきは、それまで身体の一部であったものを手放した途端、その隙間を埋めるように妙案が浮かんでくることである。恥ずかしいので、排泄にそんな副産物があることは、自分だけの秘密にしていたが、三上という言葉がある以上、同じ風に思っている人が存外多いのかもしれない。

3つ目は、馬の背の上である。現代でいえば車の運転中ということになるだろうか。そうであればこれには同意しかねる。なぜならスピードが速いときは、瞬時に状況判断しなければならないため、考えをめぐらす余地は残っていない。といって渋滞中はイライラして、ひらめきを得る心理状態にない。イライラする理由は、車の能力を自分の能力であるかのように一体視して、その力が発揮できないことを歯がゆく思うためである。この3つ目の上には、自分以外の登場人物（馬）が存在するが、その相手をどう



写真 客間寝室の船底屋根裏

扱うかがポイントとなる。それで思い出したのが、私が指導を受けた左官職人である。私がまず驚いたのは、前述の車同様、鋺という道具を身体の一部に取り込んでしまったかのような、自由自在の鋺さばきである。その上、間近で観察しようと、その手に注目した私はさらに驚くことになる。幾度となく壁に土を押さえつけてきたであろうその親指が、他の四指に比して、明らかに不自然に、平たく肥大していたのである。鋺を身体の一部に取り込むことに飽き足らず、自らの親指を鋺化するという、職への献身を垣間見て、心が震えた。ここまで一体化できる相棒となれば、鋺上で、そして馬の背の上でひらめくアイデアもどんなに素晴らしいものであろうかと興味が湧く。

この三上に共通して言えるのは、どれも意識から遠ざかることで、かえって素晴らしいアイデアを得るということではないかと考える。枕の上はもちろんのこと、厠の上での排泄行為も、脳からの指令ではなく、自律神経によってコントロールされている。最後の馬の背については、鋺化した親指に見るように、「道具を本位として身体の動きを従とせよ」ということであり、これは「利を休めよ」と名付けられた利休の茶道の教えでもある。両者ともその極意は、道具や鋺を従属させて使役するのではなく、むしろそれらに自己を没入させて、意識を自分の外に手放すことにある。その行為の先に、僅かに感じられる恍惚感——無我の境地が得られるのである。

分け登るふもとの道は多けれど

同じ高嶺の月を見るかな (一休)

毎日見る夢や排泄行為のように、繊細な感覚を要する左官や、脳を占めている複雑な点前の手順を、自律神経に委ね得るには、愚直なまでの果てしない反復が必要である。反復作業は、機械化の得意とするところではあるが、占脳→反復→会得による脳の解放←ひらめきの飛び込み という図式が成り立つのであれば、反復を手放してしまうべきではない。機械によって成果物は楽して得られる一方、製作者が無我の境地に至る道は閉ざされ、それゆえ恍惚感も得られないことになる。これが製造現場で起きていることであり、機械化の波を受けたあらゆる職種で、報酬とは別個にあったやりがいの喪失につながった要因ではなからうか。その波は製造業にとどま

らずAI（人工知能）という形で、更に多くの分野を浸食しようとしている。例えば頭脳戦である囲碁の世界でも、思考の鍛錬で道筋をつけていく人間に対し、高速化した計算能力を武器にしらみつぶしのパワープレイをするAIが、勝利を収める場面が増えてきている。しかしこれも勝ち負けの結果に、必要以上に囚われてはいけない。スポーツ全般に言えることだが、パフォーマンスの1つ1つに楽しみを感じられることが、何よりの喜びなのであるから。

そう信じて、私も愚直に手作りの家づくりを続けている。最後に、我が家のトイレを紹介したい。アーチ状に張り巡らした竹木舞の上から土天井を塗り込め、はみ出た土を、垂れるがままに任せてある。口から摂取した食物の栄養は、胃で消化分解され、腸で吸収された後、排泄される。その最終工程を建物の最深部に照らし合わせ、腸にある無数のヒダを土の鍾乳洞で表現した。もちろん腸での吸収と同じく、表面積を大きくすることで消臭効果を狙ったものである。鍾乳洞の下、私の意思とは無関係に、毎日休みなく働いてくれている腸に、感謝の思いをこめつつ、滞りのない排泄に祈りを捧げるには、もってこいの空間ではないかと、今朝も私はトイレに籠る。



写真 土天井の鍾乳洞